

---

# 黒の組織との決戦

時原真実

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒の組織との決戦

### 【Nコード】

N6009H

### 【作者名】

時原真実

### 【あらすじ】

いつもの平凡な(?)日々。

だが、忍び寄る魔の手により、その生活は一変したー…。

タイトル・本文共に編集しています。見にくいかもしれませんが、早めに終わらせるつもりなので、これからもよろしく願います

ユニークアクセス(読者数)、10000アクセス突

破!!読者の皆様、本当にありがとうございます!

## プロローグ（前書き）

この話は過去（決戦の数日前）に戻ります。短いです（笑）

## プロローグ

「ククク…やっと見つけたぞ…」

「見つけたって…奴ですかい？」

「ああ…久しぶりだな…」

シエリー…

それに…

工藤新一…」

外に雨がしとしと降る中…こんな怪しげな会話がされた事は誰も知らない…

これが……この事件の幕開けだった…。



悲しい事に文字数が足りないので「あ」ばかり書いていきます（  
涙）

ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああああああああ  
あ

奴ら

その日、コナンの元に一通の手紙が来た。差出人は……

『黒澤 仁』

「……!! (黒に…ジン?! 奴らか?!)」

コナンは博士の家へ向かった。

「灰原!!」

「工藤君! これ見てちょうだい!!」

哀が差し出した封筒……差出人は…

『黒澤 仁』

「灰原、まさか…」

「ええ、これはジンの偽名…正体がばれたんでしょっね…とりあえず中を見てみましょう…」

「『シエリー…お前の命が惜しければ満月の夜に杯戸港の丘の上の倉庫へ来い…組織に戻り、薬の研究を続けるなら命は助けてやる』ですって」

……哀は手紙を読み上げた。いつもどおり冷静に…

「『工藤新一…満月の夜、シエリーと共に杯戸港の丘の上の倉庫へ来い…毛利蘭という女は我々の元だ…少しでも齒向かったら女の命は無いと思え…』……だと？ヤロオ……」  
続いてコナンも読み上げた。怒りに満ちた声で。

蘭はついさつき小五郎に頼まれてタバコを買いに行ってたのだ。た。

「蘭さんが人質に取られているなら下手に動けないわね…」

「くそつどうすりゃいいんだ?!」

その時、コナンの頭に西の高校生探偵・服部平次が浮かんだ。

「服部だ!!!」

「え?」

「アイツなら…いい案を出してくれるかも知れねえ!」

「止めた方がいいわ…確かにいい案は出してくれそうだけど服部君の事だからそんな事言ったら一緒に行くって言ひ出し兼ねないでしょ?あなた…言っただじゃない…これ以上、関係の無い人は巻き込まないって!だったら止めた方が…」

「そうかも知れねーけどオレら二人でどうにか出来る相手じゃねー

んだろ？だったらどうせ誰かに相談しなきゃならねー…だったら…

…服部が1番なんだ」

コナンは正面から哀を真っ直ぐに見つめて言った。

## 正体

「分かったわ。」

哀は折れた。そして、続けた。

「じゃあ早めに行動しないと満月まで3日しかないわよ」

「ああ・・・って博士は？」

「研究室に居る筈よ。」

「じゃあ博士にもそう伝えてくるよ！あ、それと・・・あんまり一人で出歩くなよ！」

「それぐらい分かってるわよ。あなたも気をつける事ね」藤君

ドサッ

物が落ちる音がした。そこには・・・

園子が居た。

「そ…園子…」

「まさか…このガキンチョが新一君なの?!」

「…そういえば蘭、よく言ってたわね…アンタと新一君がそっくりだって…」

「ま、まあ… というか何で此処に？」

「何でって…玄関先で小1の子が真刻な顔して喋ってたら何かあったと思うのが当たり前でしょ。」

「あ…そっか…」

コナンはしまった!という顔をした。

「それより!私の質問に答えてよ!」

「…」

園子は目に涙を浮かべてコナンに詰め寄った。

「答えてよ!蘭が危ないんでしょ?!」

「ちよ…落ち着けよ…」

園子は必死にコナンに問いかけた。そこで哀はコナンの後ろから

「あなたの言うとおりよ…」

「灰原…」

「私が言うわ…彼女にバレたのは私のせいでもあるしね。」

「江戸川君は

・・・正真正銘工藤新一よ。工藤君が小さくなったのはある組織のせい・・・」

「え・・・」

「最後まで・・・聞いてちょうだい・・・」

~~~~~

「・・・って事よ。」

それを聞いた園子は慌てて言った。

「じゃあ蘭はその組織に・・・なら私も蘭を助けに行く！私は何度も蘭に助けて・・・」

園子がそこまで言った時、コナンは気付いた。園子の手の中の携帯電話の・・・

通話中ランプが点灯しているのを・・・

## 話された真実

「そ．．．園子．．．携帯．．．」

「あ．．．和葉ちゃんと電話してたの、忘れてた．．．」

「ちよつと貸してちよつだい。」

哀は園子から携帯を借りると

「和葉さん．．．今の話、聞いた？」

「アタシ今からそつち行くで！平次も連れて！」

「あ．．．ちよつと！和葉さん！」

電話は一方的に切られた。

「どつする．．．」

「とりあえず、博士に．．．」

「そつね。じゃあ園子さんも行きましよう。」

）  
）

「なんじゃと？！園子君だけでなく、和葉君にもばれたじゃと？！」

「ええ．．．今こつちに向かつてるらしいわ．．．」

四時間後

平次と和葉が阿笠邸へ来た頃にはコナンが呼んだ警視庁の目暮、白鳥、佐藤、高木に横溝など・・それにFBIのジョーディ、ジェームズ・・

この際、全員に言っ飛ばしておくと決めたのだった。その中には小五郎や英理、少年探偵団の姿まであった。

コナンは話し始めた。

自分の正体、組織の事・・蘭が人質に取られているという事・・すべて話した

そこでコナンは疑問に思っていた事を口にした。

「あの・・杯戸港の丘の上に倉庫なんてありました？あつたといえは小さな小屋ぐらいですよね？」

コナンの質問に目暮は…

「ああ・・あの建物の下に大きな地下室があつてな…そこが倉庫になつているんだ。」

「じゃあそこに蘭ちゃんはおるん?!」

「あ、ああ・・きつとな」

(蘭・・・・)

「くそっ・・・」

小五郎が悔しそうな声を出した。

当たり前だ、自分がタバコを買いに行かせなければよかったのだから・・・。

新一…（前書き）

文章グチャグチャです…

アドバイス下さい…

新一…

「うう…」

あれ…ここ…どこ？

私どうしたんだっけ…確か…

くく

「じゃあね！園子！」

「うん！また明日！」

私は園子と別れて一人で歩きだした。

コツコツ…

後ろで足音がする。私が立ち止まったら足音も止まった。何なの？  
！私はそう思っって後ろを見た。

- 誰も居ない。

私は前に向き直った。そこには黒い服を着た男の人が二人いて…  
何か嗅がされて…それで気が遠くなって……気が付いたらここに  
居たんだ。

まだ頭がクラクラする。

「！」

その時やっとなんか私は自分がどんな状況に置かれているか気が付いた。小さな窓のついた部屋におかれていて左手には手錠をかけられて手錠のもう片方は鉄の棒にかけられてた。何度も事件現場に居合わせたり、事件の話聞いてた私はすぐにわかった。『監禁』されてる。でも誰が？何のために？私には訳がわからなかった。その時、あの黒服で銀髪の人が入って来た。

私は聞いた。

「あなたは誰？どうして私を？」

「お前は工藤新一を呼び出す為のオトリだ」

「新一を？新一を呼び出してどうするの？それに・・・私がオトリじゃ新一は来ないんじゃない？」

「フツ・・・」

そう怪しげに笑うと男はどこかへ行ってしまった。私には何が何だか分からない。ただ分かっているのは、あの人が新一を狙っているって事・・・

怖い・・・

誰か助けて・・・

新一はここへ来ちゃいけないんだろっな・・・

分かってる・・・

けど・・・

私は・・・

私は・・・

新一をコフロの中で呼んでしまっ・・・

新一・・・

新一・・・

助けて・・・

新一・

逢いたい・

でも・

来ちゃダメ・

でも・

逢いたい・

私ってワガママだね・

新一・



## 捜査会議（前書き）

テストがあつて投稿が遅れてしまいました!!

これから週1

で投稿したいです。m┐┌・┐┐ m

## 捜査会議

決戦となるであろう満月の日の夕方近く…阿笠邸で確認の為の打ち合わせが行われた。もちろん少年探偵団は居ない。

打ち合わせが進む中、コナンの頭の中は蘭の事でいっぱいだった。

(蘭…蘭…頼む、無事でいてくれ…蘭…)

「…君！工藤君！！」

ジヨディがコナンに話しかけた。

「あ…はい(やべ…聞いてなかった)」

「その様子だと聞いてなかったみたいね」

「はい…」

「じゃあもう一度言うわ！A班とB班は下っぱの人達を担当して、C班とコナン君は毛利さんを助けに行つて、D班E班F班は組織の上の方の人達を頼むわ。阿笠博士と哀ちゃんとG班は組織内のデータ確認。遠山さんと鈴木さんと残りの捜査官は外で待機、服部君は

…」

「オレは和葉とおるわ」

「…え？」

平次の驚き発言に皆が目を見張る。

「和葉とおる言うてんのや」

「へ、平次…？」

「和葉が危ななったらオレが守る」

(平次…)

「じゃ、じゃあ服部君も外で待機してちょうだい」

「おう！！任しとき！！！！」

「あ、それとこ班とコナン君と鈴木さんは毛利さんの救出が終われば各自で考えて行動！！以上だけど質問は？」

「無いです！！」

「じゃあ時間まで仮眠をとりましょう」

(仮眠って…寝れるワケねーし……)

その時…

ぐおおおお！！！！！！

ぐおおおお！！！！！！

小五郎のイビキだ。

(まったく…呑気なもんだぜ…)

「あなた、普段あの声の隣で寝てたのね…」

「ああたいしたもんだろ？」

結局子五郎と同じ部屋に居た哀、コナン、英理、阿笠博士は寝るこ  
とが出来なかったらしい…

## 心のテレパシー

「兄貴、あの女記憶が無いみたいですね？」

「ああそのようだな…」

バーボン…アイツの空手の能力を買ったまではいいが記憶を無くされるとはな…それも組織の事だけ」

「この事伝えに行きやすい？」

「ああ…そうするか。FBIの奴らが来る前にな…」

バーボンは蘭だったのだ。

）  
）

「え…ウソでしょ…？」

私は耳を疑った。いきなり『お前は俺達の仲間だ。コードネームはバーボン…』なんて言われて。

「バーボン、あの方からの命令だ。これに刃向かえばお前は殺される。」

殺られるって…殺されるって事だよね…？それにあの方って…？  
ジン』と名乗った人が続けた。

「工藤新一を殺れ。」

新一を…私…が…？

「よく考えておくんだな」

そう言ってジンは部屋から出て行った。

）  
）

「そろそろ行きましょう」

ジヨディ先生のこの一言で

組織との戦いが…  
俺達の運命を分ける戦いが…

そして『工藤新一』を取り戻す戦いを……

始める予告になった。

「工藤君」

「おわっ何だよ灰原？（ヤバ…声裏返ったかも…）」  
「これ、飲んで行きなさい効力はおよそ二週間…」

そう言って差し出されたのは小さな錠剤。

「これってAPTX4869の……」

「ええ。小さな身体じゃ色々と不便でしょう？もちろん私も飲んで行くつもりよ。」

「サンキュ。さっそく飲んでくる。」

……もうこの運命からは逃れられない。

黒に生まれた私。白にはなれない。

もう運命は覚悟していた。

なのに……なにか心残りがあるのは気のせいかしら……

「よしっ」

やっぱ元の姿はいいな……ってそんな場合じゃねえ！

オレどうかしてるな………空は曇り……

まさか最後にバッドエンドになったりしねーよな……

蘭…アイツだけは助けないと………蘭…無事で居るよ！

「新一君…新一君！」

「あ、園子……」

「『あ、園子……』じゃないわよ！まったく……どーせ『蘭…無事で居てくれ……』とか考えてるんでしょうけど……ホント熱いわねえ………」

「な……わ……る……だ……?!（何で分かるんだ?!）」

「あら、凶星〜?」

「違いよ……!……!……!」

「工藤君！鈴木さん！早くしてちょうだい。」  
「あ、はい」

）  
）

え？新一？  
今、新一に呼ばれた気がした。  
もちろん空耳だろうけど…

でも今は頭が痛くてしょうがない  
…丸一日飲まず食わずでコンクリートの地面に座ってるんだもん。  
風邪ぐらい引いてもおかしくないか…

時折風邪の舞う音が響く。お化けが怖い私は音が鳴る度におどろいている。

小学生の頃、階段の裏に隠れた時と同じ気持ち。  
でもあの頃は時間も短かったし、新一が助けてくれた。  
気付かなかった。

私の中で新一がこんなに大きな存在だったなんて。

なのに…なのに私は新一を殺さなければいけないの…？  
この手で？？そんなの無理だよ……………。

私に笑顔を与えてくれた新一。

17年間私の支えになってくれた新一。

私にとって掛け替えの無い新一。

私がへこんだ時にいつも笑いかけてくれた新一。

ずっと…ずっと一緒に居たいと初めて私が感じた人。

そんな新一を私が殺すの？

無理だよ。

どうしたら

どうしたら

どうしたら

どうしたら

どうしたら新一を殺さなくてすむの？？

どうして

どうして

どうして

どうして

どうして私がこの人達の仲間なの？？

コロシタクナイ …  
でも殺さないと私が殺される。  
私は新一に伝えたい事があるのに。  
新一を失ったら伝えられない。  
自分を失っても伝えられない。

ツタエタイ …

無理だよ、愛する人を殺すなんて。

）  
）

オレ達 オレと博士と灰原とおっちゃん はジヨディ先生の車に乗せてもらった。

「ねえ、工藤君」

「あ、何ですか？ジヨディ先生」

「あなた、いつ頃からコナンなの？」

「大体：四ヶ月ってトコですね」

「結構長いのね。ところで…あなた私達（FBI）の前でも子供のフリしてたの？」

「え、ええ…そうですが…」

「クス…」

「へ?!」

「あなた、少なくとも私とシユウにはバレバレよ。」

「そうだったんですか?!」

「ええそうよ…?!」

「どうかしたのかね？」

「ポルシェ356A…それに…ベルモットの愛用しているバイク…」

「おしゃべりはここまでのようね…」

「あれ??おっちゃん、また寝てる…」

「呑気ね…」

「全くだぜ………」

オレ達は車から降りて歩き出した。

その時、曇り空から雨が降り出し、雷まで鳴り出した。

それはオレの心を表した天気なのかもしれない…。

## 悪の入り口

「工藤君、毛利さん（小五郎）、哀ちゃんは拳銃を持ってちようだい。一般人は持たないでね危ないから」

三人はFBIから拳銃をわたされた。

「じゃあ…組織を破滅へと導いてあげましょうか。鈴木さんと遠山さんにはもう一度言うわ。絶対に中へ入っちゃダメよ!!」

「わかったわよ」

園子が当たり前、という風に言った。

「それにしてもアンタ達が羨ましいわ。和葉ちゃんは服部君、蘭には新一君…私には誰も居ないんだもの…」

「何言うてんのん!!平次なんかおってもおらんくても同じ…」何か言ったか？和葉??」

「平次は頼りないって話しや!!」

「何やと、コラ!!」

周りの空気が張り詰めていてもこの漫才夫婦には何も変わらないのだった。

この二人のおかげで皆は少しリラックスできた。

「園子、オメエには京極さんが居るだろ？」

「でもねー今みたいなピンチに来てくれないんだもの……」

コナンは 八… と呆れた様に苦笑した。  
そして、気を取り直し、

「それより、早く行きませんか？」

とジョディに問い掛けた。

「あ、CIAから一人だけ応援が来るらしいのよ。まだまだ見習いらしいけど ドジのくせに少々頭の切れる子だって言ってたわ……」

(ま、まさか?!)

「あ、来たわよ。」

ジョディの指差す方には必死で丘を駆け上がって来る少年の姿があった。

その少年はコナン達の方を向くなり、

「すみません下でタクシー降りたんですが以外と阪がきつくて……  
おわっ?!」

言葉が終わるか終わらないかのうちに少年の姿が消えた。

「相変わらずドジだな…本堂…」

「ホント、あそこまでドジなのはすごいわね……。工藤君、あなたあんな人に正体バレるなんて…」

うるせーよ　と言いながらコナンは英助に

「よお、しばらくだな、本堂…」

「あつ新一さん！！久…ハアハアしぶり…です…ハアハア」

「ジヨデイ先生…応援ってコイツ…？」

「そうです！！よろしくお願いしますね新一さん！！僕も新一さん達と一緒に蘭さんを…」

コナンはかなり無理のある笑顔で

ああ…と言った。

メンバーは揃った。

後は…組織を倒すだけだ！

新一は意気込み

「行くぞ！！！！」

と叫んだ。

空は暗く涙を落としながら新一達を見守っていた。

まるで悪魔のように…

悪の入り口（後書き）

く蘭の気持ちく(前書き)

蘭の一人称です

く蘭の気持ちく

雨…

古い窓の隙間から雨が落ちてきた。

私の代わりに涙を流す雨

私が苦しい時にはいつも雨が降っている。

どうしよう。

泣きたい。

けど

涙が出ない。

悲しい。

私は私じゃ無い。

私は心が無いみたいな…

『私』という人物は居ないみたいな…

自分が分からない。

自分…私は何？

私の役目は新一を殺す事なの？

私は新一の敵なの？

私は…

私は…

新一のそばに居れない。

新一は私の全て。

新一は私に欠かせない。

新一は……

新一は……

私の愛する人。

新一は……殺せない。

新一よりも私が殺された方がいいな………

新一に気持ちを伝えれないのは残念だけど。

私には新一を殺す勇気なんて無い。

新一の『待つててくれ』って言葉。私の生きる意味を表してた。私の生きる意味は新一が帰ってくるのを待つ事なのに……。

私はポケットに手を入れてみた。中にはケータイに付いてたマスコット。ケータイは無かったけどマスコットは残っていた。

新一からもらったマスコット。

蜘蛛屋敷の事件の時に無くして大騒ぎしたマスコット。

マスコットと新一が被って見えた。

慌ててマスコットをポケットに入れる。

柔らかい手触り。

暖かい……

新一みたいに……

頭がぼうつとしてきた。新一……

新一なら……

新一なら……

新一ならどうするのかなあ……

今まで新一を想わなかった日なんて無かった。

今まで新一を忘れた日なんて無かった。

今まで新一と過ごすのが当たり前だった。

知らされる真実(前書き)

ぎゃーん！

ネタが浮かばーん！

そのせいで……遅れてすみません……。

## 知らされる真実

「それじゃあ全員そろったし、行きましようか」

ジヨデイが言った。

そして新一達はアジトに入って行った。

「暗いわね……」

「ホントだな。」

その時志保が足元にフタがあるのに気付いた。

「工藤君、これ……」

「フタ??? 地下への入り口か??」

そのフタはとても重く、二人がかりでやっと開いた。中には暗い穴がぽっかりと空いていた。新一の考え通り、地下への入り口だった。そこからはそれぞれの班に別れて行動となった。

「じゃあな、宮野。気をつけるよ」

「ええ…あなたもね」

）  
）

「外で待機もなかなか暇よねえ」

「ホンマやわ。やっぱりオレも中行けば良かった」『和葉はオレが守る』なんて言ったのはどこの誰よ？」

「あゝあゝスマンかったなあ……」

「それよりさっどつして和葉ちゃんを守るなんていきなり言い出したのよ？」

「えーとまあまあ……」

「『まあまあ』じゃないわよ……」

「ねえ和葉ちゃんも知りたいわよねえ……」

「べ、別にそんなん……」

「とにかくく……！ああ言った訳は？！」

「な、何かそうしなアカン気いしてきたんや！それ以外なんも無いんや……！」

「はあ……（この男、中々鈍感ね……）」

く

く

新一達は拳銃にサイレンサーをセットしている音を聞いた。

「拳銃の準備はいいかしら？入るわよ？」

「はい」

ガチャ……

「動くな！」

「FBIよ！」

「えっ……………?!」

新一はそう言うだけで精一杯。  
だって…

ドアを開けるとジンに拳銃ヘレッタを突きつけられた蘭が居た。

その上蘭の手には…

拳銃が握られていた。



## 苦しみ（前書き）

最近 感想無いです（泣）

感想や要望、手直ししたらいい部分等…

辛口でも結構です。

コメント下さい！

本当にお願いします。

あたしはいつか…いつか自分の小説を、このサイトの方以外にも読  
んでいただきたい、と思っています。

ここでは その勉強をしたいんです。

お願いします。アドバイスを下さい。

苦しみ

「バーボン」

「ー今度は何をいわれるんだろう？  
また新一の事？ー」

カシャン…

ジンが投げてきたのは…拳銃…

「もうすぐ工藤新一達がやって来る。それはお前用の拳銃だ」

「ー私…の…？」

「いままでに使ったの…？ー」

その時、

「兄貴！バーボンが脱走…え？」

「バーボンは脱走なんて… …！？」

「じゃ、じゃあ別人…ですかい…？」

そこに連れてこられたのは… …

『中森青子』

蘭にそっくりな少女だった。

「わ 私にそっくり…」

「あ 青子にそっくり…」

「…お前も組織の事を知ってしまったからには生かしてはおけないな…」

ジンの凍りつくような視線と言葉に青子が震え上がる。

「FBIの奴らが来るまではお前は人質だ。まあ無事に帰れるかは運しだいだな。」

そう言っとジンは去っていった。

「名前…なんていうの？」

「私は毛利蘭。」

「蘭ちゃんってよんでいい？」

青子の名前は中森青子。」

「いいよ。宜しくね…」

「蘭ちゃん、どうしたの？元氣ないね…」

「わ…私…この人達の仲間みたいなの…でも記憶がなくて…」

「えー…！蘭ちゃんが?!」

「そ、それに…私、」

蘭の目から再び涙が溢れる。

「幼なじみの新一…工藤新一…を殺さなきゃいけないって…」

「あの高校生探偵の工藤新一君の事？」

「うん。新一を…つ殺したくなんか…ないのに…」

「だっ大丈夫だよ！きつと…それより、あの工藤新一君って青子の幼なじみの快斗に似てるんだ」

青子はあわてて話題を変えた。

「へえ…どんな人なの？」

「マジックが上手で意地っ張りでキザで…」

「そうなんだ。新一も意地っ張りでキザなんだあ」

「……でもね、すごい鈍感なの！」

「アハハそっく……り……（あれ……？）」

「ら、蘭ちゃん……?!」

蘭は精神的な苦痛や体調不良で一瞬、意識を手放した。

「あ、ごめん……何か目まいが……」

「蘭ちゃん……すごい熱だよ。大丈夫？」

「だ……大丈夫だよ！……それより、さっきから上が騒がしくない？」

「あ……ホントだ。何だろう？」

ガチャ…

「バーボン 奴らが来た。お前の使命は工藤新一を殺す、それだけだ」

蘭は手錠を着けられたまま拳銃を握らされた。

「動くな！」

「FBIよ」

——新——

「ら……蘭……？」



「蘭……？（何でだ……？何なんだよ……！！）」

新一がたたずんでいると、ジンは不気味な笑いを浮かべながら

「バーボン……」

「（は？どういう事だ？バーボンって……確かにそう言ったけど……蘭とウオツカとあの柱の影の奴だけ……あんな影に居る奴に何か言うか？）」

ここまで考えて新一にある仮説が浮かび上がった。

「……！（まさか……？まさか……）」

だが、この答え以外は……出なかった。

蘭Ⅱバーボン

この答え以外……

ジンが続けた。

「殺れ」

「……だ。」

「早くしろ」

「いや……だ」

やっぱり蘭なのだ。

バーボンは蘭なのだ。

これこそ、目を背けられない現実そむというもの。  
そう、たった1つの真実。

「バーボン。」

やめろ。

「歯向かうな。これはあの方直々の命令だ。」

「……………」

「バーボン」

言うな。

「バーボン!!」

「言うなああああ!!」

「し、新一さん？」

「工藤君？」

「新一…?」

「どういう事だよ!ジン」

「分からないのか?この女は俺達の仲間のバーボンだ」

「んな…んな訳ねえよ!蘭は…蘭はてめえらの仲間になるような奴  
じゃねえ!」

「……………」

しばらくの沈黙の後<sup>のち</sup>

「…ね」

「え?」

「…ごめんね。新一」

「蘭…？」

「私、仲間だったみたい…」

「なっ…」

「ご…ごめんっ…ね…」

蘭のガラス玉のような綺麗な瞳から再び雫が滴る。

「バーボン。殺る気がないならお前に用はない。記憶もない事だしな」

「……………」

「…じゃあな。バーボン。」

ドサッ…

「蘭っ！」

ジンはまず蘭の足を打ち抜いた。そのまま、腕や肩に弾を掠らす。

「次は頭だ…」

ジンは不敵な笑みと共に……

発砲した  
-  
:  
:  
:  
:

FILE 12……戦いゝ涙ゝ（後書き）

お願いです…コメントをお願いします…

作者：時原真実からのお知らせ

ご無沙汰してます、時原真実です。

ここ最近、更新が進みません。

ただでさえネタが浮かばない上、修学旅行や入試、塾の冬期集中まであって、とてもでは無いですが更新は難しいです。

年内に更新が出来る可能性は0に近いです。

こんな駄文を読んでくださっている読者の方には悪いですが執筆中止させていただきます。

復帰は2月頃の予定ですが場合によっては春休み頃かもしれない。

そんな状況のなかも、時間を見つけたら、更新します。

特に名探偵コナンのFFは今、とても難しいです。

スランプってヤツでしょうか…

とりあえず、伝えたいのは

連載短期間休止

未完はしない！

この二つです。

それでは、時間がないので簡単にしか書けませんでした。そろそろ失礼します。

少し早いですが、よいお年を…

戦いゝ残された幼き探偵達ゝ（前書き）

遅くなり申し訳ありません！！

どう謝罪すればいいのか…

遅れた理由（言い訳…）は活動報告のほづに簡単にですが書いてますので、気になる方はそちらを…（<―>）

本当に申し訳ありません！！

戦いゝ残された幼き探偵達ゝ

「でもよお コナンと灰原があんな事言うなんて、びっくりだな」  
「ええ……」

ここは米花公園。少年探偵団の三人は、あの衝撃的な事実について話し合っていた。  
そんな中、歩美だけはずっと俯いていた……

「コナン君が……」  
「あの……工藤新一?!」  
「……………」

「ああ。」

「ねえ！新一お兄さん！」  
「歩美ちゃん……」  
「新一お兄さん達はその悪い人達を倒しに行くんだよね？」  
「ああ。蘭も助けなきゃなんねーし……」  
「なら、歩美も行く！」  
「え？」  
「オレも！」  
「僕もです！」  
「え？え？」  
「蘭お姉さんが危ないんでしょ?!歩美、見捨てれない！」  
「オ、オレ達もだぞ！」

「ええ！僕もです！」

口々に言う3人。

その目は真剣だった。

だが、鋭い声で3人の声は制された。

「ダメよ」

「哀ちゃん…どうして…？」

急にしおらしくなる、歩美の声。

「あなたたち、分かってるの？」

私達が追っているのは、国際的な犯罪組織。

今回の作戦が失敗したとするわ。運良く、その場は逃げ出せても…」

哀は一呼吸おいて言った。

「私たち…それにあなたたちも、すぐ殺されるわ。」

しばらく沈黙が続いた後、コナンが口を開いた。

「分かったか？オメエ等まで巻き込む訳にはいかねえんだ…」

「でも！歩美たち、同じ少年探偵団だよ！今まで、危ない目にあつた事もたくさんあるよ！」

「歩美…」

「だけど、皆で乗り越えて来たんだから……」

少しの沈黙があり、コナンが口を開いた。

「わかんねえか？」

お前等がいると足手まといなんだよ……」

もちろん、本心ではない。

歩美達を危ない目に合わせない為には自分と関係ないように…関わらないようにしなければならぬ。その為には、自分を嫌わせるのが早い。

― そう思ったのだ。

もちろん歩美にはコナンの本心が見えない。

「哀ちゃん…」

ホントに足手まといなの…?」

歩美は哀に問う。

「そうね…貴女達が居ても出来る事は無いわ。命の保証も無いしね。」

貴女達はおとなしくしておきなさい。」

(「コナンくん…」)

戦いゝ残された幼き探偵達ゝ（後書き）

遅れた割にシヨボいですね？

すみません

本当にすみません…

戦いゝ交差する想いゝ（前書き）

諸事情により、短いです

戦いゝ交差する想いゝ

「蘭……!!」

ジンが発砲した瞬間、新一は飛び出していた。

パン……!

弾は、飛び出した新一の腕を貫いた。

蘭は、しっかりと新一の腕に守られた。

「……っ!」

新一は一瞬顔をしかめたが、すぐに蘭の心配をする。

「大丈夫か、蘭」

「新……」

蘭は目を見張る。

「新一こそ、大丈夫?」

申し訳なさそうな顔をする蘭。

「ああ、掠っただけだ。」

本人は掠っただけかといっているが、実際はそれどころではない。結構な傷だ。

蘭はポケットからハンカチを出して、新一の傷口を縛る。

「ごめんね、新一……」

新一は蘭に「気にするな」という風に少し笑いかけ、鋭い目でジンを見据えた。

「ジン……」

てめえは…俺の手で警察に突き出してやる!!」

）  
）

場面は変わり、志保達のグループ。

志保以外は研究室のメンバーを上手く催眠ガスで眠らせ、柱に縛り付けて行く。

志保は組織のデータをすべてコピーして行く。

あるデータに手を出した時、志保の手のスピードが落ちた。

APT X 4 8 6 9 のデータだ。

（もし、解毒剤が出来たら…）  
震える手。

（私と工藤君の関係は…）

いつの間にか止まっていた手。

その手を見つめながら志保が思う。

（どうなるのかしら…）

戦いゝ交差する想いゝ（後書き）

この小説に入れて欲しいシーンなどがありましたら感想かメッセージにお願いします

志保の想い（前書き）

今回も志保中心です

## 志保の想い

志保は、自分の仕事を手早く終わらせた。

組織のパスワードも覚えているので、思っていたよりスムーズに進んだ。

そして、最後のデータを写し終えた頃、その場にいる組織の者の拘束が完了した。

志保は他の人に声をかけた

「それじゃ、一旦出ましょ。このまま中にいるとデータを紛失する可能性もあるし……」

いくつかのグループに分かれ、外を目指す人

まだ内部での仕事がある人……

それぞれの目的地へと進んだ。

志保は一人の捜査官、「由里・クローラ」と共に外へ出る事になっている。

クローラは25歳。

そこそこの名の知れる科学者だ。（中学では野球部のエースだったとか、柔道部の助っ人をしていたとか、万引き犯を殴り倒したとか、おてんば説が多々ある）

もちろん、FBIで活動している事は秘密。

だが、高校の頃、両親を組織に殺され

以来、名を変え、組織の撲滅を願って科学者をしている。

愛しい人を殺された2人。  
科学者であり、組織を恨み…  
同じ目的を持ち、前に進む。

「ねえ、由里さん」

志保が口を開く。

「なあに？志保さん」

「人を、好きになった事ってある？」

由里は予想もしなかった、質問に驚いた。

「…え？」

「や、やっぱり何でもないわ。ごめんなさい…」

(私…何を…?)

秘めていた想い。

出してはならない想い。

諦めようとするほど膨らむ想い。

必死に秘めていたのに…想いが顔を出してしまう。

私は…どうすればいいのかしら…

## 志保の想い（後書き）

調子がいいのでこのままいけば年内にもう1話頑張れるかも…！

それと、全体的にサブタイ修正中です…  
見難かったらすみません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6009h/>

---

黒の組織との決戦

2011年10月9日17時34分発行